

Ching Kwan Lee,

*Gender and the South China
Miracle: Two Worlds of
Factory Women.*

Berkeley: University of California Press,
1998, xiii + 210 pp.

た しま じゆん こ
田 嶋 淳 子

I

本書はマルクス主義フェミニストである著者 Ching Kwan Lee (李静君: 香港中文大学社会学部助教授) がジェンダーの視点から香港企業の経営する香港と深圳の工場における2つの労働世界を描いたエスノグラフィである。この2つの工場は同じ音響機器を製造するラインをもつが、労働者の管理体制において大きな違いがある。香港の工場は家族主義的ヘゲモニー (familial hegemony) と呼ばれる労働者との協調的管理体制をとり、深圳の工場では地域主義的専制 (localistic depotism) と呼ばれる労働者に対する出身地域ごとの同郷者ネットワークを通じた強圧的管理システムをとっている。また、「既婚女性労働者」(matron worker) と「未婚女性労働者」(maiden worker) という2つの異なる労働者像がそれぞれの労働現場で社会的に構成され、労働者自身にも主体化されている。本書の問題意識は労働現場における権力関係とジェンダー・アイデンティティの違いがなぜ生じるのかにある。

香港はいうまでもなく、アヘン戦争以来1997年7月1日の主権返還までイギリス植民地体制下におかれ、政府の不干渉政策のもとで、企業が経営管理の自律性を確保しつつ経済的發展をとげてきた地域である。深圳は香港と境界を接する地域として、1978年以降の経済改革・対外開放政策の実施にともない、

社会主義中国の中でもっとも早く経済特別区が設置された地域だが、政治的には権力依存関係 (clientalist state) に象徴される官僚主義的体制の下にある。こうした政治経済体制の違いにもかかわらず、そのいずれにおいても、企業が経営管理における最大限の自律性を手にしていることを著者は発見する。ここで著者は国家の政治経済体制ではなく、地域レベルの労働市場における社会的組織化の違いから労働過程および労働現場の権力関係を説明できるのではないかと仮説をたてる。本書ではこうした仮説にもとづき、社会学的パズルを読み解くように分析が進む。

著者による調査は1992年6月から93年2月にかけて行われた。香港工場では労働者として働くことを通じ、深圳工場では作業現場における参与観察として進められたものである。本書はこれらの調査をもとに、著者の博士論文としてまとめられている。

II

まず最初に本書の構成を紹介しよう。

- 第1章 華南における2つの労働世界
- 第2章 グローバルな資本主義下におけるジェンダー化された生産の権力関係
- 第3章 経済のリストラクチャリングと香港-広東リンクの再建
- 第4章 深圳における労働市場の社会的組織化
- 第5章 香港における労働市場の社会的組織化
- 第6章 地域主義的専制
- 第7章 家族主義的ヘゲモニー
- 第8章 生産の権力関係に関するフェミニスト理論へむけて

方法論的補論——民族誌のラビリンズ——

第1章では2人の女性労働者が取り上げられ、この2人がおかれた工場の労働管理体制に関する大きな違いが指摘される。Yuk-ling は香港の工場で働く43歳の2児の母親である。この工場は10年以上働き続けてきた中年の既婚女性労働者を中心に構成され、家族主義的ヘゲモニーと呼ばれる管理体制によ

り経営されている。Chi-ying は同じ香港企業が経営する深圳の工場で働く湖北省出身で22歳の未婚女性労働者である。この工場では若年未婚の出稼ぎ女性労働者たちが出身地域に応じて地域主義的専制と呼ばれる厳しい監視つきの管理体制のもとで働いている。ここでは2人の女性労働者の労働世界の違いがなぜ生じるのか、という本書の問題意識が提示される。

第2章では本書の理論的背景として、この問題を分析するための3つの視点が提示される。第1は生産における権力関係、第2はジェンダー、そして第3は中国人女性である。生産における権力関係では、権力関係が強圧的な専制からヘゲモニーへと段階的に進むという Burawoy の考えを批判的に継承し、政治経済体制の違いを越えて、地域レベルで考察を進める必要のあること、階級的視点に加えてジェンダーの視点からアプローチをする必要性が強調される。なぜなら、女性労働者は国家や企業以外の同郷ネットワークや家族・親族のネットワークに依存しており、これらはいずれも性差別化された形で組織され、特定の労働市場の運用の中にはめ込まれているからである。さらに、経営者側の利益と許容度に関して、いかなる条件下で合意と専制が分岐するのかが問われるべきだと指摘する。マクロな状況は常にミクロな個別のケースに埋め込まれていると著者は考える。ここで地方レベルにおける労働市場の構成が工場内の権力関係および異なる管理システムの採用を促すとの仮説が提示される。第2のジェンダーの視点は労働現場がイデオロギー、組織、アイデンティティを操作する権力過程としてのジェンダーによって成り立っており、ジェンダーが不可欠の視点であることが指摘される。また、方法としてのエスノグラフィによる中国人女性に関する研究では、ポスト・コロニアルな視点の導入により、従来のジェンダー・エスノグラフィの限界を越えたところで中国人女性を語ることが可能な状況にあるとの指摘がなされる。

第3章では、1949年以降別々の道を歩むことになった植民地香港と、広東省の発展について考察する。香港では1960年代後半のストライキをひとつの契機

として社会保障制度の改善が進み、経済のリストラ策が模索されていく。1980年以降中国の対外開放・経済改革の中で、深圳を中心とする華南地域への香港からの投資は企業のリストラと表裏一体の関係の中で展開する。同時に、「農民工」という形で出稼ぎ労働者が沿海都市の労働市場を形成していく。香港と広東のリンク再生は香港企業の華南地域に対する投資として展開する。中国大陸において、香港企業はその経営上の自律性を確保するため、権力機構との緊密な「関係」(guanxi)を構築し、問題解決能力を獲得する。香港側はこの関係を通じて、労働管理面で最大限の自律性を確保していく。

第4章では深圳の労働市場における社会的組織化を取り上げる。広東省レベルの調査によれば、出稼ぎ労働者の7割は女性である。深圳の労働市場は主に若年未婚の農村出身女性たちによって構成される。工場労働あるいは都市への出稼ぎは農村女性の新たな可能性を開くものとなっている。女性たちは主に同郷者ネットワークを通じて就労場所を確保し、企業側もネットワークを通じて労働者募集を進める。企業にとっては、労働力供給を柔軟にし、女性労働者を同郷者の相互依存と相互監視による地域主義的専制のもとにおくことを可能とする。農民から工場の女性労働者への変化は楽しさ、厳しい試練、個人的な冒険、家族への義務、性差別、経済的な関心などに満たされている。だが、もっとも重要なことは出身地域ごとに分割された労働市場のもとで職場のジェンダーとヒエラルキーが形成されていることである。

第5章では香港における労働市場の社会的組織化が取り上げられる。香港では1950年代から70年代にかけて、大陸(特に広東省、福建省)からの移民の流入により、製造業における低賃金の労働力が確保されてきた。しかし、脱工業化が進む中で、製造業に従事する女性労働者は中高年齢化が進む。香港工場は女性労働者の7割が既婚者である。ここでは親族からの援助の入手可能性や女性の家内労働に対する家族の需要が、働く女性にとってもっとも重要な要素を構成する。経営側は雇用確保のため、家族主義的な協調的管理体制をとる必要性を認識し、労働者

による一面での自律的な職場環境を許容する。以上の2章の分析から、経営側の利益と許容度はあらかじめ決められているのではなく、それぞれの労働市場によって組織化されることが指摘される。

では、職場において具体的にはどのような権力関係が形成されるのか。第6章では深圳の地域主義的専制（出身地域ごとの関係を利用した職場管理システム）をとりあげる。職場規則は主に就業時間中の女性労働者の行動＝身体を拘束するものとして定められている。工場労働未経験の女性たちにとって、時間と身体の拘束は罰金による厳しい管理で維持される。工場は住まいと食堂が出身地域のヒエラルキーに応じて空間的にも区分される。出身地域間の差異はそれぞれのネットワークの中で性差と階層性を埋め込むように、職場の権力関係を構成する。経営管理層には香港人男性が位置し、中間管理層には客家と広東出身の男性が位置する。作業組長には広東出身の女性が従事する。管理層に同郷者をもつ地域出身者は優遇され、労働強度の軽い作業や超過勤務を優先的に割り当てられ、作業組長への昇進も速いが、そうでない場合にはこうした可能性が閉じられている。職場における出身地域ごとの構成は労働者の生活空間にも同様に影を落とす。ただし、現場の労働者間の他者性と境界は状況に応じて変化する。女性労働者同士はたとえ他郷出身者であっても友人関係となる可能性もあり、その境界は流動的である。男性労働者との関係では同郷者以外の男性との恋愛関係は周囲の非難を受け忌避されることが指摘される。

一方、第7章では香港での労働現場を支配する管理体制である家族主義的ヘゲモニーが描かれる。家族主義とは、家族の利益やその生活世界としての家族を維持するためにあらゆる資源を蓄積する行動に価値の優先性をおくことと定義される。家族主義は女性たちの有償の労働を要求し、可能にするが、仕事の場所と時間を拘束し、彼女らを特定の雇用者に縛りつける。経営管理における家族主義は女性たちの「既婚労働者」というアイデンティティを強化する。ここには目に見える罰金や張り出された規則はないが、女性労働者が管理者の意向や規則を身体化

しており、彼女たちの行動には自律的であると同時に自己規制という形で内化された支配が貫徹している。つまり、枠づけられた自律性による暗黙の了解が成立している。こうして経営上のイデオロギーである家族主義的ヘゲモニーはジェンダー・アイデンティティとしての「既婚労働者」という彼女たちに与えられたカテゴリと結びつき、既婚女性としての家族への責任を第一とする彼女たちの自己像を規定する。それは彼女たちが望み、肯定しているものでもある。

第8章では以上の考察を通じて、第2章で提起した理論的問題への回答が示される。すなわち、第1には専制的支配からヘゲモニーによる支配へという時代区分図式を捨て去る必要性が指摘される。第2には働く女性たちのそれぞれの利益は多様なアイデンティティにより構成されており、生産の権力関係にこうしたジェンダー・アイデンティティの視点を組み込むべきことが指摘される。第3には労働市場の組織化は家族や地域的なネットワークおよび国家の役割からくる制度的な力の網により形づくられており、性差と労働市場の組織化の内的連関が生産におけるジェンダー的視点からの考察により明らかとなる。第4に中国女性研究および女性労働者研究は階級的視点を越えて、ジェンダーの視点から初めてその本来の姿を示すことが可能になると結論づける。

III

本書を貫くキーワードは家族主義的ヘゲモニーと地域主義的専制であり、権力関係の中で構成される女性への2つの呼び方「未婚女性」と「既婚女性」はこれらの言葉を取りまく主体によって、その社会的文脈に応じて構成されていく。その解釈の過程は多層的であり、必ずしも一致しない。権力関係と社会的文脈の中で構成される女性像の解明は量的な調査が示し得ないものである。特に、権力関係を女性労働者の言葉で描いた第6章および第7章はエスノグラフィ以外の方法では達成できない成果といえる。本書は理論と方法が織りなすアンソロジーとして、理論的に高い水準で議論を展開しながらも、女性労働

働者一人一人の物語としての側面も十分に展開されている。内部に入り込み、関係を読み解く上で、参与観察を通じた調査は不可欠であり、決して容易な作業ではなかったことが想像できる。

この点に関し、最後の補論において、著者は1993年2月時点で香港工場が閉鎖され、再調査が不可能となったこと、深圳の工場労働者たちが職場への不満から地方労働管理处へ集団で抗議の手紙を書いたことの2つの事件に触れている。後者は彼女の調査が関与しているとは言えないが、まったく無関係とも言い切れない。参与観察とはその調査の過程自体が対象者に一定の影響を与えるものであることを教えてくれる。

以上のように、本書の叙述と分析は二項対立的な構図がみごとに展開するが、それだけに時として、実態とのずれが気になる点がある。たとえば、評者の蘇南における調査によれば、出身地域から維持されている同郷者ネットワークは労働者が次なる就労先を選択する上での情報や機会をもたらす資源として、女性たちに認識されている。本書ではこれが企業による管理支配を貫徹する手段として利用される面が強調されすぎており、プラス面への考察が希薄なものと思われる。また、若年未婚の農村女性にとって、出稼ぎが新たな人生を開く可能性をもつとの見方は聞きとり調査により初めて本音として語られるとの指摘があるが、評者らは対面式のアンケート

によってすでに聞き出し得ている結果である。参与観察の価値は高く評価されるが、仮説は他の社会学的調査および量的な面での調査を経て検証される必要がある。

さらに、中国における出稼ぎ労働者に関して、労働市場の性別構成や地域別構成などマクロな統計がなく、地域レベルでの労働市場の規模と構成が不明な点は残念である。香港企業は外部の公的機関や労働市場にほとんど依拠せず、同郷者ネットワークによって、労働力の調達を行っている。これは基本的に国内の郷鎮企業をとりまく労働市場状況と同じだが、郷鎮企業ではここでの調査対象企業のような管理形態がみられないのはなぜか。今後他の合弁、外資企業との比較研究が求められる点ではないだろうか。

最後にマクロな統計数字に関する著者の分析は、ミクロな参与観察にもとづくデータ分析が見事であるだけに、若干見劣りがする観は否めない。以上の些細な問題点は著者自身がすでに十分認識している点であり、改めて指摘するまでもないかもしれない。婚姻、家族のみならず、労働関係におけるジェンダー視点からの研究が、中国において必要なことはいうまでもない。著者・李静君による本書の試みは、その嚆矢として今後とも高く評価されるであろう。

(淑徳大学社会学部助教授)